

まえがき

人は他者とのつながりの中で生きて、死んでいきます。他者とつながる限り、対立する状況が生じることは避けられません。なぜなら、何らかの問題をめぐって人それぞれ利害や立場が根本のところでは違っているからです。

対立状況をもたらす問題はいつの時代でもなくなりません。ところが最近になって、マネーゲーム、引きこもり、情報格差、データ加工、サイボーグ、遺伝子診断、ゲノム編集など、これまで経験したことのないような問題が浮上してきました。それらは以前より格段と錯綜しているだけでなく、不確実性という新たな特徴をも帯びています。そしてこれらの背景には、コンピュータでつながるデジタルコミュニケーションの影響があります。

たとえば、AI（人工知能）やロボットの導入によって働き方や暮らし方が変容しています。高齢化や少子化に加え、SNSやコンビニ利用の単身者が増えることから、共助の力も弱まっています。報道に関して真実とフェイクの境界が不分明になり、分断と憎しみが蔓延しています。バーチャルリアリティが浸透し、伝統や理想といった価値の無意味化も進行しています。

21世紀も20年代に入りました。デジタルコミュニケーションの影響は今後ますます大きくなり、社会を根本から変えていくことでしょう。現在でもその影響を受け、人と集団と国家のあいだで対立と混迷が深まっています。その渦中で人々は戸惑い、不安を覚えています。孤立し、目標を失い、将来に絶望している人も少なくありません。

ところで残念なことに、既存の倫理学はそうした状況に対応できていません。大半は19世紀の「個人の動機」か、20世紀の「環境の中の行動」の枠組みに止まっています。また、「日本文化」を持ち出す倫理学では、個人を関係から分離せず、白黒の決着をつけない「多様を包み込む曖昧さ」の思想に依拠しています。そのキーワードは「間（あいだ）」ですが、そこには外国人労働者や、LGBT、AI ロボット、サイボーグの居場所があるでしょうか。

倫理学がデジタルコミュニケーションやその他の問題を包摂するためには、わたしの考えでは次の二つの観点が必要となります。一つは、コミュニケーションを論理的に把握し、そこに「構造」を見る観点です。もう一つは、関係を情緒的に捉えて安易に一致をめざすのではなく、対立の現実を直視し、対立を移動させるような「方法」の観点です。

この「構造」と「方法」の観点を組み込むとき、本書の「システム倫理学」が誕生します。システム倫理学の根本的な視点と基本的な枠組みについては、本書の序章に当たっていただくことにし、ここでは従来の倫理学と比べてどこが新しいかを主要な五点に絞って紹介しましょう。

第一点は、コンピュータを介したデジタルコミュニケーションを含め、「すべての事物とそのつながりの関係がコミュニケーションである」とする、コミュニケーションの一般理論です。これがシステム倫理学の土台です。

コミュニケーションの原義は「何か」をやり取りするつながりです。その「何か」は言葉や身振りだけではなく、形をもつ事物なら何でも構いません。やり取りがくり返される中で形はパターン（構造）になります。そしてこのパターンがコミュニケーションの動きを方向づけるように働く（構造化）と、そこに外部から区切られた内部、すなわち自己を維持するシステムが成立します。

つながりとコミュニケーション、パターンの働きと構造化、つながり合いとコミュニケーションのシステム。これらを互換すると、あらゆる事物のつながる関係がコミュニケーションになります。物体同士も電子エネルギーをやり取りしますし、細胞同士も生体分子をやり取りします。その中から稀に構造化が生じてシステムが出現するのです。宇宙は膨大なコミュニケーションのネットワークとして立ち現れます。

第二点は、人を「四次元のコミュニケーションシステムの統合体」として捉える視点です。これが四次元相関というシステム倫理学の枠組みを支える根拠です。

宇宙という膨大なコミュニケーションのネットワークの中で、人同士のコミュニケーションの特徴がどこにあるかといえば、それは身体の表現を介して「意味の解釈」をやり取りするところです。やり取りの中から解釈パターン（構造）が形成され、この働き（構造化）によって相互的なコミュニケーションのシステムが成立します。

わたしの考えでは、人の構造化には四つの次元があります。具体的には、人は、環境の中で身体を土台にしながら、「自己言及」の働きによって「理性」「知能」「本能」といった他の三つの働きを統御しています。その中で「意味」の「解釈」が生じます。

これまで「人」の捉え方は「人類」と「人間」に分裂してきましたが、四次元のコミュニケーションシステムの統合という視点から両者を統一することができます。同様に、システムの次元構成に着目すれば、生命、生物、物体、機械、コンピュータ、ロボットを人と比較することができます。

第三点は、人間の意味の世界が「四次元相関」によって構成されている限り、「四次元相関」としてあらためて再構成できるという考えです。これはきわめて大胆であり、影響するところ大です。

四次元の統合が基礎にあるため、人のコミュニケーションの内部では四つの次元が連動します。四次元のつながり合いを本書では「四次元相関」といいます。これを図にしたものが図1です。

人間の意味の世界は、心、対面関係、集団、制度、社会全体、歴史、思想にまで広がり、これらはふつう別事象として扱われています。しかし、コミュニケーションの視点から見れば、それぞれの事象はすべてコミュニケーションのシステムになります。

また、心の中の良心、対面関係における信頼、集団にとっての慣習、制度の設立目的、歴史における伝統、思想の核心である価値も、すべてシステムの構造化となり、「四次元相関」として再構成されます。

図1 四次元相関の基本図

第四点は、「倫理」をコミュニケーションシステムの構造化として見る視点です。システム倫理学の名称はこの視点に由来します。

これまで「道徳」は心の信念、「倫理」は人間関係や集団のしきたりに限定して用いられてきました。しかし、コミュニケーションのシステムを「倫」に、システムを成り立たせる構造化を「理」に対応させるなら、倫理（または道徳）の及ぶ範囲は意味世界の全体に広がります。つまり、意味の世界はそのまま倫理の世界なのです。これはまったく新しい倫理の見方です。

第五点は、「四次元相関」の思考法です。システム倫理学は一般理論であると同時に、現実を分析する有効なツールです。これを保証しているのがこの思考法です。

四次元の相関とは四次元で一組ということです。相関のうち一次元だけが偏重されると、そこから特定の「類型」や立場が現れます。特定の類型や立場は一面的であり、そこに固執すると対立が生じます。「四次元相関」の思考法は、類型や立場の元にある四次元の「相関」にたえず立ち返り、四次元のバランスを考慮しながら偏りを修正します。これは禅仏教でいう無差別の視点に通じていますが、四次元の構造があるかないかは決

定的な違いです。この思考法を用いれば、事象や問題や立場の構造を再構成し、この再構成に基づいて対立状況を移動させることができます。

本書はシステム倫理学を初めて体系的に展開したものです。システム倫理学は同一の枠組みを用いて人間に関するあらゆる領域の概念や問題を論じることができます。本書ではそのうち、性格、業種、遊び、因果性、家族のゆらぎ、代理出産、安楽死、研究尺度の検討、生（生存・生活・人生）の構造、生きがい、動物とロボット、心と魂、デジタル社会、民族紛争、等を取り上げています。

システム倫理学がめざすのは、利害や観点を異にする人々が、「対立しながらも、違いを認めてつながり合う」世界です。あるいは、人と動物とサイボーグと AI とロボットといった異質なシステム同士が、互いに長所を伸ばし、短所を補いながら、切磋琢磨しつつ、支援し合うような「競合的共生」の時代ともいえます。

システム倫理学の完成にわたしは6年を費やしました。このシステム倫理学こそ21世紀にふさわしい哲学であると確信しています。それでは、これから皆さんをこの新しい思考の宇宙へご案内しましょう。